

私の研究は“A Study on Subordinate Clauses”と題した従属節の研究です。今まで、従属節（副詞節）の配置は文頭か文尾、どちらにおいてもいいと習ってきました。もちろん主節 + 従属節にしても、従属節 + 主節にしても文法的に意味している内容は変わりません。しかし、2種類あるということは、使い分けがあるということです。そこで、従属節の配置によってその意図する内容はどのように変化するのかを明らかにするために調査・研究を行いました。また従属節はその言葉どおり、補足的・付加的な節であるのかどうかも明らかにしたいと思います。接続詞は数が多くすべてを調べることができないので、譲歩を表す *although* と *though* そして理由を表す *because* と *since* を調べています。また、配置に関しては、従属節が主節の中に組み込まれるタイプもありますが、用例が少ないため省きました。

調査を行う前に、まず従属節に関する2種類の先行研究について調べました。1つは、主節の方が従属節よりも情報の価値において大切であるという概念は必ずしも正しいとは言えないということを *when* 節で示していました。つまり、コンテキストによって、*when* 節の方がより情報価値が高い時があり、それは情報構造に密接な関わりがあるということです。2つ目の研究は、原因節の *because*, *as*, *since*, *for* などの頻度や役割を、ジャンルを考慮して調査をしています。この研究では、頻度や使用法において様々な結果が示されていましたが、最終的にいえることは、文法的には同じ意味を持つ接続詞であっても、それぞれ違う役割があり、使い分けがなされているということです。以下がこのような先行研究をもとにした調査結果です。

1 . *although* と *though* について

1) *although* と *though* の比較です。コーパスとして FLOB を調べました。まず分かることは、主に、*although* は前置され *though* は後置されるということです。基本的に *though* よりも *although* の方が譲歩を強調して、主節が効果的に伝達されるための基盤を与えるといえます。この場合 *although* 節は前置されてはいますが、情報の価値としては主節とほぼ同等です。また、*though* の後置にはヘッジの機能に関係がありません。自分の意見が少し強く、場合によっては無礼に感じる内容の時、*though* を主節に付け加えることで、その主張を遠慮がちに、あるいはぼかすことができます。このような用法の *though* は後置されていても新情報というわけではなく、また、このヘッジ機能を持っているのは *though* だけです。このような理由から、一概には言えませんが *although* は前置されることが多く、*though* は後置されることが多いようです。

2) *although* の頻度ですが、Informative prose 対 Imaginative prose はおよそ 3 : 1 です。Informative prose は <形式張った表現> といえますが、*although* が圧倒的に多いことが観察されます。このことは、言語を正確に伝えることを旨とする情報文において、文と文と

の論理関係を明確にするための手段として、*though* の強意形と考えられる *although* が好まれることが関係していると考えられます。

次に Informative prose 中のジャーナリズムの分野と Imaginative prose にあたるハリーポッター・シリーズ第1巻を見てみました。ジャーナリズムは、FLOB の Informative prose と同様に、*although* が好まれていました。さらに配置においても、*although* は前置、*though* は後置されるという結果でした。逆にハリーポッターは違った結果で、Imaginative prose では、*though* の方が使われていたにもかかわらずハリーポッターでは譲歩の接続詞としては、*although* がより使われていました。(しかし、*though* が使われていなかったという訳ではなく、譲歩ではなく副詞的に使われるという、別の用法を持っていました。このような付加的で副詞的な *though* の機能は、話し言葉的な使い方です。) これらのことから、*although*, *though* は共に譲歩を表すという点では同じだけれども、それぞれが特別な用法を持っていると言えます。

2 . *because* と *since* について

ここでは圧倒的に *because* が理由を表す接続詞としての地位を確立していることが分かりました。これは、*because* は原因・理由を表すときのみに使われ、その的確性が、どのジャンルにおいても好まれるようです。また、*because* の配置に関して言うと、*because* はほとんどの場合で後置されます。つまり、*because* は新情報を導き、話題の中心になるということで、主節よりも情報価値が高いと言えます。また、*since* は一般に旧情報を導くと言われていたので、前置が多いのではないかと思いましたが、残念ながら今回の私の調査においてはそれを実証することはできませんでした。以下がジャーナリズムとハリーポッターの結果です。

1) 第一に言えることは、*because* の配置は、ジャーナリズムの 10%、ハリーポッターではたったの 1 例のみが前置されていて、ほとんどすべてが後置されているということです。その 1 例でも *because* 節は新情報ではなく、旧情報にあたります。なので、*because* は新情報を導くので後置されると言えます。また、ジャーナリズムにおいては、情報構造に加えエンドウエイトの法則を考慮しています。エンドウエイトとは、文末焦点のことで、比較的重い内容を文末に近いところにおき、頭部過大を避けることです。今まで述べたように、*because* 節は基本的には後置されますが、新情報を含み、情報価値が大きくなるため、時々節の語数が多くなることがあります。そのため、主節と従属節の語数において、あまりにも差がある時は *because* 節が新情報を含んでいても、前置されることがあります。実際調べたところでは、前置された *because* 節が平均 8 語に対し、後置された主節は平均 25 語でした。この現象はフォーマルで、スタイルを重視するジャーナリズムにのみ見られました。

2) *since* はジャーナリズムでは 10%程度で、ハリーポッターでは全く見ることはできませんでした。これもやはり、*since* の持つ多義性によるものだと思います。

ほとんどの場合で、主節と従属節の配置を入れ替えても、文法的な誤りであるとは言えません。しかし、入れ替えた場合、両者とも同じように伝達内容を効果的に伝えられるとは限りません。意味する内容は同じであっても、受け手の立場を考慮するかどうかによって、受け手の影響の受け方は変わってきます。また、従属節は二次的で、単なる補足だということも、いつも正しいわけではありません。時には主節のために枠組みを与え、ときには話の中心となり、情報の価値も変わってきます。最後に、このような要素はコミュニケーションをする上で不可欠であり、もっと活用していくべきものだと思います。